

かいほ ジャーナル

Japan Coast Guard Journal

海上保安庁
JAPAN COAST GUARD



特集 機動防除隊発足30周年
特殊救難隊発足50周年





機動防除隊発足

30周年記念式典

National Strike Team

30年の節目を胸に、高い知識と技術、
強い使命感を持ち世界をリードする
海上防災専門部隊を目指して

Always Ready!!

30年にわたる歩み

10月24日「機動防除隊発足30周年記念式典」が横浜市で開催されました。

機動防除隊は、主に油や危険・有害物質の海上への流出事故に迅速に対応するために設立されました。国際的な海上交通量の増加や、環境保全の重要性の高まりを背景に、海上保安庁は専門部隊としての体制を整備。以来、30年にわたって「海を守る」役割を担ってきました。

瀬口海上保安庁長官から「アジア地域の外国海上保安機関の長官らと話をすると、機動防除隊の油流出事故における防除措置や能力向上支援にいつも感謝されます。幾多の苦難に立ち向かい乗り越え、たゆまぬ努力と実績を積み重ね、海上防災にかかる知見と技術に磨きをかけ続けてきた歴代隊員達と諸君を、海上保安庁長官としてとても誇りに思います。」と訓示がありました。

また、赤松第三管区海上保安本部長からも「この30年の歴史は関係の皆様から得た、専門的知識と技術、歴代隊員達の経験の積み重ねが圧倒的な実力、現場力となっている」と訓示がありました。

そして、大戸横浜機動防除基地長は「機動防除隊が現場で専門家としての器ではなく、専門知識、そして経験に裏打ちされ

た技術であると肝に銘じ、世界をリードする海上防災専門部隊を目指していきたい」と熱意を述べました。

本式典では、海上保安庁の中で海上防災に対処する唯一のプロフェッショナル集団「機動防除隊」の30年の歩みを振り返る映像や資料も披露され、その成果と使命感を改めて共有する場となりました。

展示訓練

式典後には船の機関室からアンモニア燃料が漏れたことを想定した機動防除隊による展示訓練が行われました。

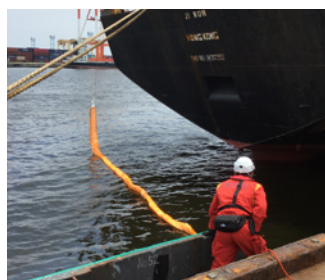
化学防護服を着装した隊員によるガス検知、アンモニア燃料の漏洩箇所特定及び漏洩防止措置の実施、閉鎖空間の換気に必要な資機材の展開など、実際に現場で使用する資機材を使用した実践さながらな動きを披露しました。

近年、機動防除隊は従来の資機材に加え、ドローンを積極的に活用し、現場活動の効率化を図っております。油流出事故の現場では、油膜の広がり方は風向や潮流により刻々と変化するため、上空からの観測は極めて有効であり、ドローンの導入により、油膜の位置、面積の迅速把握、人が立ち入れない場所の安全確認など被害状況の早期把握や防除活動時における指揮判断能力の面で効果的な役割を果たしております。



機動防除隊とは？

機動防除隊は、海上保安庁で唯一海上防災に特化した業務を行う「海上防災のスペシャリスト」です。全国各地で発生する海難、地震、台風などの自然災害により海上に流出した油やHNS（危険・有害物質）の防除、海上火災など特殊な海上災害に対応することを主な任務とし、24時間365日全国各地で発生した事故に備えるほか、各地で実施される訓練研修にて海上保安官の指導業務も行っております。



油防除対応

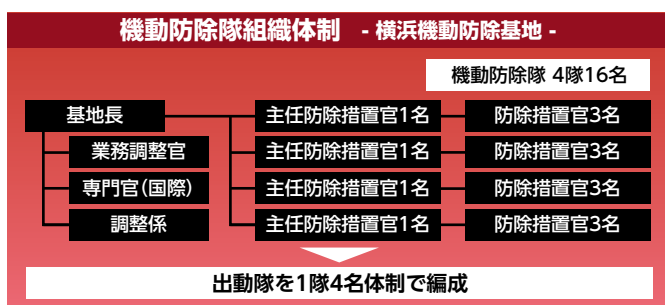


HNS事故対応訓練

機動防除隊発足

1995年4月に油や危険・有害物質などの防除の専門的知識を有するチームとして発足。

1997年1月に日本海で発生したロシア船籍タンカー「ナホトカ号」重油流出事故、東京湾で発生したパナマ船籍原油タンカー「ダイヤモンドブレース号」の原油流出事故対応やHNS事故への対応体制強化のため、順次隊員の増強がなされ現在は4隊16名の編成になっている。



機動防除隊員章

隊員章に書かれている羽は「アホウドリ (albatross)」の翼です。アホウドリは優れた飛行能力を持っており、長距離移動を得意とする鳥です。その所以から、古くから船乗り達からは幸運の象徴とされてきました。また、アホウドリは、“海の知見者”とも言われており、機動防除隊が築きあげてきた知識・技術を持って事態の局限化を図り、現場を導く機動防除隊の役割と一致することから、機動防除隊のシンボルとして採用されました。



機動防除隊発足30周年記念エンブレム

横浜機動防除隊発足以来、機動防除隊員に受け継がれてきた隊員の誇りである出動服の配色の炎で機動防除隊が実施してきた海洋汚染の防除活動などに対する情熱と誇りを表現したもの。

第一機動防除隊から第四機動防除隊を4つの炎で表現するとともに、燃え盛る防除活動への情熱と誇りを表現している。





特殊救難隊発足

救える命は必ず救う！
どのような状況であっても
最後まで諦めない



10月31日「特殊救難隊発足50周年記念式典」が横浜海上防災基地で開催されました。

金子国土交通大臣から、「日夜、尊い人命の救助活動に尽力されている特殊救難隊に敬意を表する。今後も、様々な救助の場面において、国民の皆様の期待に応えるべく、日々の研鑽に努めていただきたい」との祝辞をいただきました。

また、瀬口海上保安庁長官から「これまで実績を積み上げてきた歴代隊員を含む特殊救難隊を誇りに思うとともに、現状に甘んずることなく、常に訓練・研修に励み、成長し続けるよう今後も精進してほしい。隊員のご家族には日頃から、特殊救難隊にご理解をいただき感謝します」と訓示がありました。

そして、岡羽田特殊救難基地長は「海上保安庁、正義仁愛の精神のもと、救える命は必ず救う。苦しい、疲れた、もうやめたでは人の命を救えない。どのような状況であっても、我々は最後まで諦めないことを誓い、救助を待つすべての人に『希望の光』を届けることができるよう、これからも前進してまいります。」と決意を述べました。

特殊救難隊は発足以来、“殉職者ゼロ”。

これからも徹底した安全管理を積み重ね、救える命は必ず救います。

50周年記念式典

Special Rescue Team

展示訓練

特殊救難隊による羽田航空基地のヘリコプター「いぬわし2号」、消防船「ひりゅう」、巡視艇「はまぐも」と連携し、火災を消火しながら船に残された人を助け出す事を想定した訓練が行われました。



特殊救難隊とは？

危険物を積載した船舶の火災消火や、転覆、沈没船からの救出、ヘリコプターでの吊上げ救助など、高度で専門的な知識、技能を要する全国各地の特殊な海難救助・事故などに対応する専門部隊です。

特殊救難隊発足

1974年11月東京湾で発生した液化石油ガス(LPG)タンカー「第拾雄洋丸」と貨物船「パンフィックアリス」の衝突炎上事故を契機として、特殊火災の消火、毒物等危険物流出下での乗組員の救助、転覆船内からの乗組員救出、沈没船からの流出防止等特殊な海難に対応するため、1975年10月に発足しました。当初は隊員5名の編成でしたが、現在は特殊救難隊統括隊長2名、6隊39名計41名の編成になりました。

	潜水作業	降下・吊上げ救助	救急救命	火災・危険物・CBRNE ^{※1}	羽田特殊救難基地
特殊救難隊	高度な知識・技術が必要とする特殊海難における人命・財産の救助				統括隊長2人 6隊 計41人
機動救難士	ヘリコプターと連携した吊上げ救助等迅速な人命救助				10基地×9人 計90人
潜水土	潜水技術を必要とする海難における人命・財産の救助等				全国の潜水指定船23隻 計137人

※1 CBRNE: Chemical(化学), Biological(生物), Radiological(放射性物質), Nuclear(核), Explosive(爆発物)に起因する事故・災害
※2 混合ガス潜水資機材を使用した場合に限り、深度60mまで潜水可能
※3 航空機の搭乗を考慮して、一定の制限を設けている。

特殊救難隊員章

42年前に特殊救難隊隊員(佐々木俊彦)がデザインしたものです。



特殊救難隊発足50周年記念ロゴ





海を守り続け進化し続ける30年 世界に誇れる海上防災のスペシャリストとして

油濁災害の最前線で磨かれた技術と結束 進化し続ける「海の盾」

機動防除隊に着任して3年目になる藤田副隊長と小川隊員。年齢も経歴も異なる二人だが、同期として同じ研修を受け、今は第三機動防除隊として同じ現場に立っている。

藤田副隊長：機動防除隊に入隊したきっかけは、日の丸を背負って活動したいという想いが原点です。（日の丸をつけて活動できるのが特殊部隊のみのため）

潜水士として4年間、機動救難士として11年間勤務した経験があり、潜水士や機動救難士時代に現場で培った安全管理能力をもとに“安全第一”の考え方を今も大切に現場業務に対応しています。

当庁で唯一の「海上防災のスペシャリスト」であるからには、その名に恥じぬよう日々努力を怠らず、高度な知識・技術を身に付け、現場で頼られる存在になりたいです。

小川隊員：父が防災の仕事に携わっており、私も同様な業務をしたいという想いから機動防除隊を志願しました。

機動防除隊入隊後は専門的な知識を身に付けることはもちろんのこと、防除資機材の取扱等の技術面を習得することに苦労しております。特殊部隊ということもあり、機動防除隊にしか配備されていない資機材も多く、それら資機材の取扱いを一つ一つ把握することは非常に時間がかかります。

しかしながら、日々の訓練や研修を通し、豊富な現場経験を持つ先輩方から適切なアドバイスや指導をしていただき、また、同じ使命感を持つ同僚と切磋琢磨し貪欲に知識・技術の向上を図っております。

いつ、何時でも現場で最大限のパフォーマンスを出せるよう日々備えています。



左:藤田博史 副隊長(第三機動防除隊)
右:小川密 隊員(第三機動防除隊)



左:五島絢平 副隊長(第四機動防除隊)
右:渡邊翼 副隊長(第三機動防除隊)

少数精鋭の現場で専門性を磨き続け伝承する

機動防除隊に着任して2年目になる渡邊副隊長と五島副隊長。共に潜水士、機動救難士として長らく救難の最前線を歩んできた二人。

渡邊副隊長：石川県の七尾にて勤務していた際、事案対応に伴い2回機動防除隊派遣があり、赤い制服の隊員が現場で鮮やかに状況を掌握し、迷いなく現場で活動する姿に「カッコいいな!」と強く惹かれました。それが入隊のきっかけです。

日々進化する新技術によって起こる可能性のある事故対応について、海上火災担当として向き合っています。その事故対応のため、導入されるハイスペックな資機材は使いこなせば非常に優秀なものばかりですが、現場で培ってきた“危険を察知する直感”を失わないようにしています。

五島副隊長：機動救難士として救難業務に従事し、次のキャリアを考えた時、救難と防災は繋がっていくと考え、“防災防除の道”を専門的に吸収したいと思い入隊しました。

次世代燃料の一つであるメタノールが漏洩した場合、燃えたら「どんな色の炎が出るのか?」「本当に炎が出るのか?」とインターネットや文献を参考に、調査と実験を行い、対応方針を検討します。

機動防除隊は限られた人数の組織だからこそ、一人ひとりの役割が広く、その分、質を落とさずに維持する責任も大きいです。資機材の質問も全国からありますが、場所によっては、資機材の新旧が入り交じっていることから、古い資機材でも現場の海上保安官に使用方法を分かりやすく指導できるよう日々勉強をしています。その点少し苦労はしますが、そこも特殊部隊の醍醐味だと思います。

機動防除隊 Interview

油防除の最前線に立つ “積み重ねた経験”と新たな挑戦

佐々木隊長：海上保安庁に入庁して潜水士や機動救難士としてレスキューの第一線を走り続けてきました。転機となったのは漁船転覆事故でした。船内から乗組員を救助した後、漁船から漏れ出した燃料油が海面一帯に漂っているのを見て、“この後、この油はどうなるのだろう”と強く疑問を抱きました。それが機動防除隊の業務に興味を持つきっかけとなり、2010年に機動防除隊へ入隊をしました。

初出動となった新潟沖のケミカルタンカー転覆事故対応を皮切りに、東日本大震災など様々な現場を経験し、沿岸に漂着した油の状況調査や油防除業者に対し適切な対応を指導助言するなど“隊員”として現場マネジメントの経験を積みました。

2023年に機動防除隊の“隊長”として戻ってきました。隊員の時は、事故現場の状況を隊長へ報告する立場。今は指揮部で隊員からの報告を統合し、適切な防除方針や緊急時の対応を派遣先の部署長へ進言するのが主な任務。

現在、防除隊は16名。潜水士・機動救難士、保安部署経験者など、多様なバックグラウンドを持つ精鋭チームです。みんなが現場で培った“肌感覚”を大事にしたい。各隊員が今まで“積み重ねた経験”を最大限に活かせる機動防除隊で在りたいと思っています。



佐々木俊政 隊長
(第一機動防除隊)

機動防除隊の国際連携・支援

2025年1月、第三管区海上保安本部横浜海上防災基地において海上保安庁の機動防除隊と、米国沿岸警備隊における災害対応の専門部隊「ナショナル・ストライク・フォース」との意見交換を実施。2025年11月には、アメリカのナショナル・ストライク・フォースの基地等を訪れ、環境防災分野に関するHNS（危険・有害物質）事故対応合同訓練を行いました。

2014年からスリランカ沿岸警備庁に対し油防除に関する基礎能力向上支援を開始し、2022年からは油防除に関する訓練・研修体制の構築のための支援を行っています。このプロジェクトの集大成として、2025年2月には、スリランカに機動防除隊等を派遣して、インストラクター養成のための技術指導と訓練状況の確認を実施しました。



外国海上保安機関職員に対して
説明する佐々木隊長



スリランカ沿岸警備庁職員に対して
技術指導する佐々木隊長



ナショナル・ストライク・フォース及び機動防除隊による
HNS事故対応の合同訓練(黄緑色が機動防除隊)

機動防除隊で使用される資機材一部紹介

化学防護服 (レベル分類あり/使い捨て)

有毒ガスや化学物質から身を守るための防護服。最上位のレベルは完全密閉型で、海上で発生し得る最も危険な事案に対応する。一度でも有害ガスに曝露した疑いがある場合は再使用不可となり、出動後は“使い捨て”。



防毒マスク・吸収缶

有害ガスを吸着する吸収缶は、ガスの種類ごとに使用できる時間が限られているため、時間管理が必要。マスク本体・ヘルメットは、焼損や破損がなければ繰り返し使用可能。



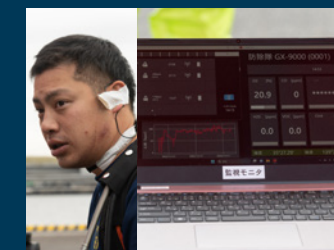
分析器(赤外分光式)

液体・固体の正体を赤外線反射データから解析し、約10,000種類の物質データベースから該当物質を特定。複数の物質が混ざっていても、成分を分解して判断できる高度な分析装置。テロ対策分野でも使用される高精度機器。



隊員生体モニタリング装備 (心拍・疲労度測定)

隊員の心拍数や疲労度をリアルタイムで把握できる装備。防除活動は化学防護服内が高湿多湿となり、ブーツに汗が溜まるほど過酷。指揮者はモニターデータを見ながら、隊員へ「帰投命令」を出すなど安全管理に活用。



特殊救難隊 Interview

全員で言うから意味がある“ナイスレスキュー！”

加藤隊長：特殊救難隊でのキャリアは12年。隊長3年目。

隊員の頃は、自分の動きに集中すればよかった。隊長は“自分以外の全て”を見て判断します。救助者はもちろん、支援船、関係者、隊員一人ひとりの状況。現場の安全管理は、隊長に必要な最大のスキルです。

訓練や現場ではチームの一体感を高めることを“意識的に”出します。

ヘリコプターで行く際は、搭乗するレスキュー班と地上での支援班に分かれ、支援班は情報収集、搬送先の調整、本部への連絡など。任務が終わるまではお互いそれぞれの任務に集中します。

任務が完了し皆が揃ったときに「ナイスレスキュー！」と言います。動いている班、支援している班があってレスキュー出来る。どちらも「ナイスレスキュー！」なんです。言葉は少なくとも隊員は自主的に動いて役割についてくれるそんな隊員のことを信頼しています。その中でも一番信頼しているのは、副隊長です。隊長と副隊長のペアは重要だと思っています。宮下副隊長にいつも助けられています。

隊員たちが主導してつくり上げた行動指針「特殊救難隊フレド」。

〈すべては要救者のために 今日も一日笑顔で帰ろう〉

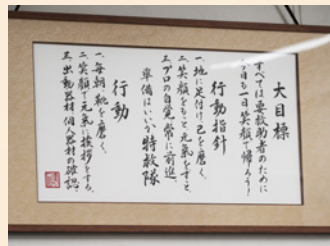
この言葉を、朝会で全員が読み上げてから1日が始まります。フレドは、今の時代に必要な“心構え”であり、日々見直しています。

特殊救難隊に引き継がれている言葉「苦しい、疲れた、もうやめたでは人の命は救えない」

この言葉は言わなくても心に常に想っており、そしてこの言葉が書かれた手ぬぐいを常に身に忍ばせています。



加藤大輔 隊長(第三隊)



特殊救難隊基地に掲げている“フレド”



宮下雅充 副隊長(第三隊)

副隊長ならではの役割、隊全体のいい関係を保つために

宮下副隊長：特殊救難隊は8年目になります。特殊救難隊はチームでの作業のため、“チームワークが重要”。

副隊長としての役割として大事にしていることは、隊員の意見をまとめつつ、隊長の意見を擦り合わせながら隊をまとめ、よい関係を保てるようにしていることです。

「どうやったら上手くいくかな?上手く回るかな?」と冷静に考えています。隊員達は色々意見を言ってくれます。間違っていることはすぐに訂正しますが、隊員達の自主的な意欲を削がないよう心がけています。

Q 特殊救難隊員に聞きました!



上江洲健太 隊員(第三隊)



前田雄大 隊員(第三隊)



清岡賢人 隊員(第四隊)

特殊救難隊のオレンジ服を受けたとき真っ先に誰に言いましたか?

全員

「妻です!」

今欲しい、器材などありますか?

「人工エラ!」「海用ジェットスーツ!」「筋肉!」「体が冷えるような隊服!」

嫌いな訓練・好きな訓練 苦手な事などありますか?

全員

「好きな訓練はありません!」

「全部嫌いです。でも訓練が終わった時は毎回楽しかったと思います。」

「耳抜き苦手です」「船酔いします」「ヘリコプター訓練の緊張感が苦手です」

「ただ、「嫌いだから、苦手だからやらない」という選択肢はありません。

任務を果たすために、自分の弱点と向き合い続けます。」

訓練や任務などでヒヤリハットがあったら教えてください

「海のと真ん中にいた時、パディと離れてしまったこと。少しの時間でしたが、パディが怪我をしてないか?など考え、とてもヒヤッとしました。それからは二度とないように代案を常に考えて事案に向かうようにしています。」

「海で作業を終えて帰るときに、隊員の1人が凄い速さで泳ぎ帰っていくのが見え、どうしたのか!?と心配しながら、海から上がった時に理由を聞いたら…“サメがいた”と。」



すべては要救者のために 今日も一日笑顔で帰ろう

羽田特殊救難基地は羽田空港基地に隣接し24時間体制で対応

“パイロットとホイストマンがいないと、我々は現場にすら行けない。

いつも助けられてばかりです” 加藤大輔 特殊救難隊隊長

塚本飛行士：救助時などは緊張感が張りつめている雰囲気ですが、パイロットが不安になったり熱くなったりしてしまうと周りのクルーに伝わってしまい、安全上よくないため、自分で鼓動が早くなっているのを感じていても淡々と冷静であることを一番に心がけています。

吊上げ救助の際は、機内でパイロット・通信士・ホイストマン・サブホイストマン・特殊救難隊の全員とコミュニケーションを取り、総合的に判断し行動する必要があります。船の構造物や要救助者の人数・容態に合わせて、現場の状況から救助手法をみんなで検討し、最善の手法にて任務を遂行するのが大事な役目です。

全員を吊り上げ終わった後、みんなが機体の中に入ってドアを閉め、人員・資器材の異常なしを確認し全員でOKサインを出す時がほっとする瞬間です。また、要救助者を無事に救急車や医療機関へ引き渡したときは、相当の達成感があります。

特殊救難隊は救助だけでなく、火災船対応や、危険物の事案など様々な状況に対応していくので、それに対してパイロットはいろんな知識能力を持たないといけない。極限の環境に身を置きながら、淡々と、冷静に、要救助者の命・仲間の命を絶対を守るという信念を持ち、これからも任務を遂行します。

藤原整備士：「ホイストマン」とは、ヘリコプターの救助活動において、命綱となるワイヤーケーブルの巻き出し、巻き上げを行う装置「ホイスト」を操作する担当の乗員です。

ホイストマンの役割は、パイロット達が真下で行われている救助の様子が見えないため、機長に細かく状況を言葉で伝え、作業状況を把握してもらうことです。「わかっていだろう」ではなく、何の準備をしているのか、どういう状況なのか正確に全てを言葉にして伝えないと、パイロット達は認識できない。イレギュラーなことが起こっても淡々と状況を言葉で説明できるようにならなくてははいけない。ここが一番苦労するところだ。

ヘリコプター内はプロペラやエンジンの騒音で、人の声はほとんど聞こえません。

特殊救難隊員は機内でコミュニケーションがとれるヘッドセットの機器を外しており、声でのコミュニケーションが困難なためアイコンタクトとハンドシグナルでコミュニケーションを取ります。ここがホイストマンと隊員の経験、そして訓練で培った「連携」が大事になるところです。

ヘリコプターから特殊救難隊員を2人～3人降ろしますが、最後の隊員が降りるとき合図で背中を「バンッ」と叩きます。実は「行ってこい!」という気持ちを込めています。



塚本拓郎 飛行士(パイロット)



ホイストマン

特殊救難隊で使用される器材一部紹介

潜水ブーツ

東日本大震災救助時に釘やガラスなどでの踏み抜き防止のため、底を改良してもらったブーツ。



スチールタンク

潜水時に使用する水中タンクは4L・10L・12L・14Lと、4種類あります。14Lのタンクは特殊救難隊のみ使用できます。航空搬送時タンクがぶつかり破損しないようにカバーを付け搬送します。



ウェットスーツ

潜水士は「オレンジ色」ですが、特殊救難隊のウェットスーツは「黄色」になります。体系に合わせてフルオーダーで作成。隊員番号があるのは特殊救難隊のみ。



防火服

特殊救難隊は危険物積載船等からの火災・爆発の鎮火などを行うため、防火服も常に準備しています。





海上保安庁アニマルニュース

ヤギ <海上保安試験研究センター>

2025年9月1日、海上保安試験研究センターに業務改善の取組みの一環として敷地内の除草を目的とした双子の姉妹ヤギ「しろ」と「ちゃ子」2頭が試験的に導入されました。海上保安庁広報活動や地域交流、好感度向上に大きく貢献してくれています。

レンタル期間を2026年3月末まで延長することが決定しましたので、愛らしい「しろ」「ちゃ子」に会いに来てください。



＼かいほHPへ／



アザラシ <第一管区海上保安本部(北海道)>

2025年11月15日、紋別港内の巡視船「だいせつ」(紋別海上保安部)係留地付近に、かわいらしいアザラシのお客さんが遊びに来ました。彼らがこれからものんびり休めるよう、オホーツクの海の安心・安全を守ります。

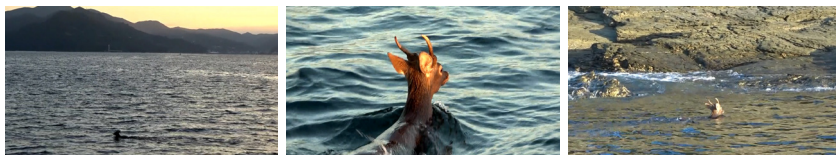


＼第一管区Xへ／



シカ <第六管区海上保安本部(愛媛県)>

2025年10月10日、巡視艇「たかつき」(宇和島海上保安部)は、海上パトロール中に愛媛県佐田岬沖合で愛媛県西宇和郡伊方町所在の黒島に向かって海を泳ぐ 鹿1頭を発見しました。 鹿は黒島に上陸するとピョンピョンと元気よく跳ねていきました。



＼第六管区Xへ／



イノシシ <第七管区海上保安本部(長崎県)>

2025年10月30日、佐世保港沖合をしょう戒していた佐世保海上保安部所属の巡視艇「あいかぜ」が海を泳ぐイノシシと遭遇しました。尻尾をフリフリしながら力強く泳ぐ姿に驚きつつも、巡視艇と距離を保ちながら安全確認。



＼第七管区Xへ／



トリ <第八管区海上保安本部(島根県)>

浜田海上保安部(島根県浜田市)所属の巡視船「いわみ」が日本海を航行中、2羽の鳥が飛来。風速18メートルの大時化の中、船首で羽を休めにきました。また別の日には、種類が違う1羽の小鳥が飛来。船橋で見張りをしている海上保安官に挨拶に来てくれました。第八管区海上保安本部公式Xのコメント欄では、最初の2羽は「ハイトカ」と「コミミズク」、2回目の小鳥は「キクイタダキ」という種類ではないかというみなさまの意見をいただきました。



＼第八管区Xへ／



JCGクルーズ2025 ～忘れられない航海、いま、始まる～

＼第十管区Xへ／



2025年11月8日、鹿児島湾において2年ぶりとなる「JCGクルーズ」を開催しました。

当日は、金子恭之国土交通大臣に視察いただくとともに、約1,300名の方々が乗船し、航空機による吊上げ救助やゴムボートによる規制訓練、市内高校生によるミュージックパフォーマンス等が行われるなど、当庁の認知度向上及び人材確保に繋がる大盛況のイベントとなりました。



中央が金子恭之国土交通大臣



巡視船「そうや」約47年間の任務を全う

＼第一管区Xへ／



2025年11月4日、解体施設への「最後の航海」に向けて釧路港から出港する巡視船「そうや」を、市民の皆様とともに暖かく見送りました。

「そうや」は、2025年11月12日、北九州市にある解体施設において解役となりました。砕氷能力を有する当庁唯一のPLH型巡視船として、1978年から約47年間、その任務を全うしました。





海上保安帳！ ジャパンコーストガード学習帳を制作

第八管区Xへ



第八管区海上保安本部(京都府舞鶴市)では、オリジナルグッズとして今回初めて「ショウワノート株式会社」様にデザインの使用許可をいただき、「ジャパンコーストガード学習帳 海上保安帳」を製作しました。

老若男女を問わず親しみいただけるものとなるよう、多くの方に馴染みのある小学生向け学習帳をモチーフにしたデザインとしており、学習帳の中には当庁の幅広い業務内容を紹介し「学習」していただくと共に、“当庁に関心を持った方”や“入庁を考えた方”が裏表紙の二次元コードから専用サイトにアクセスできるようになっております。

「海上保安帳」は、2026年1月から、第八管区海上保安本部が実施するPRイベントなどの機会に配布していきます。



※本グッズは、ショウワノート株式会社から正式に許諾を受けたうえで製作しております。



海上保安学校卒業式

首相官邸HP



YouTube



2025年9月27日、海上保安学校(京都府舞鶴市)において、石破茂内閣総理大臣(当時)をはじめとする多数のご来賓ご臨席のもと、9月期卒業式を挙行了しました。総理大臣のご臨席は2016年3月期の卒業式以来2回目であり、式典では石破総理から「最前線の現場で大きな試練に出会ったときは、共に助け合い高めあった仲間のことを思い出し、難局を乗り越え、自らの使命を果たしてください。」との祝辞を賜り、卒業生156名(うち女性17名)は決意を胸に全国各地の現場へと羽ばたいていきました。



出典:首相官邸HP (<https://www.kantei.go.jp/jp/103/actions/202509/27jcg.html>)



日仏姉妹灯台の誕生 ～観音埼灯台とミリエ灯台による 「姉妹灯台」提携～

かいほXへ



2025年11月15日、観音埼灯台(神奈川県横須賀市)とミリエ灯台(フランス)の姉妹灯台提携に関する協力覚書に署名しました。今後は、「日仏姉妹灯台」として、両灯台と関連する地域社会との間の歴史的及び文化的なつながりの促進のために、両灯台の歴史に関する写真などの相互展示や関係者の相互訪問等の分野で協力していき、より一層灯台の魅力を発信し理解促進に努めていきます。



観音埼灯台見学



署名披露



署名式長官挨拶



118番通報！転覆した船の乗船者全員救助

第九管区Xへ



2025年9月23日、「新潟市新川漁港沖で船の船尾に水が入り込みそうだ」と118番通報があり、新潟海上保安部所属の巡視艇「こしかぜ」が緊急出動し、通報から約1時間後に、転覆した船の船底にしがみついていた乗船者3名を無事救助しました。全員が救命胴衣を着用していて、ケガなどありませんでした。この救助の様子を動画で「X」に投稿したところたくさんの反響がありました。



南西諸島の火山観測

かいほXへ



かいほインスタへ



2025年11月27日、海上保安庁海洋情報部は船舶航行安全に資するために南西諸島の火山観測を実施しました。薩摩硫黄島では硫黄岳に少量の噴気を認めたほか、島の周囲に濃い変色水を確認しました。口永良部島では新岳及び古岳で少量の噴気を確認しました。



2025/11/27 薩摩硫黄島



2025/11/27 口永良部島(新岳)

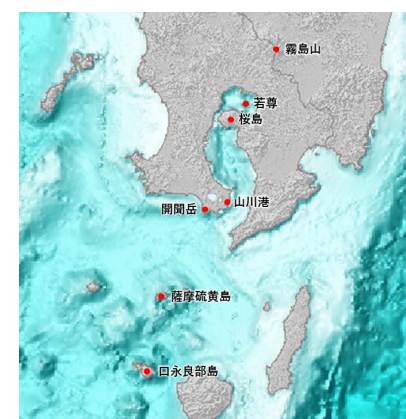
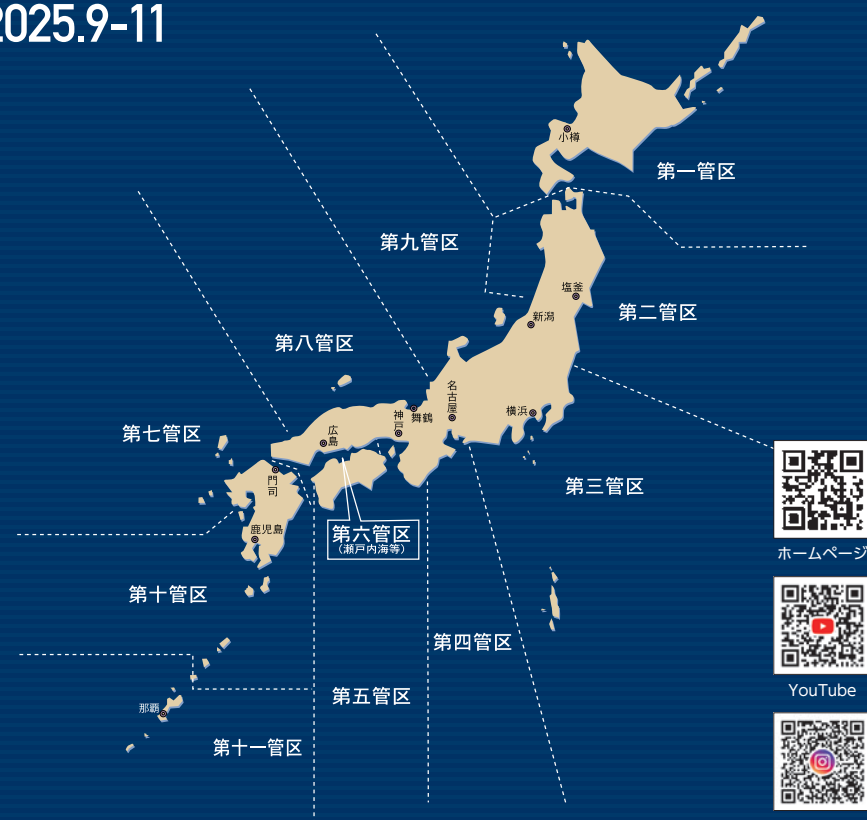


PHOTO DIARY

2025.9-11



ホームページ



YouTube

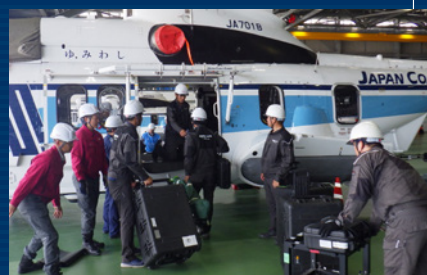


Instagram

9月 September

3日 第十管区 串木野海上保安部

インフラ事業者との
資器材搭載訓練



5日 第二管区 秋田海上保安部

飛鳥Ⅲ秋田船川港へ初寄港



27日 第二管区 秋田海上保安部

入道崎灯台まつり



25日 第八管区 舞鶴海上保安部

舞鶴ふれあいフェスティバル



25日 第十一管区 那覇海上保安部

残波岬灯台特別一般公開



26日 第三管区 千葉海上保安部

JFEちばまつり2025



11月 November

2日 第三管区 銚子海上保安部

銚子港水産まつり



2日 大学校

75期新人クルー西日本新人
カッター競技大会男女優勝



3日 第九管区 佐渡海上保安署

佐渡汽船との自主警備訓練



8日 第一管区 千歳航空基地

12年振り!
千歳航空基地一般公開



9日 第十一管区 宮古島海上保安部

ライオン株式会社とのコラボイベント



10月 October

11日 学校

海上保安学校入学式



11日 第二管区 仙台航空基地

仙台航空基地一般公開



19日 第八管区 宮津海上保安署

みやづ産業フェスタ



15日 第六管区 呉海上保安部

呉中央学園文化フェスタ



16日 学校

中舞鶴ふれあいサンデー



22日 第五管区 第五管区海上保安本部

ノエスタファミリー
フェスティバル2025



2026年海上保安庁
118番イメージモデル 鈴木 福



海上保安庁

JAPAN COAST GUARD



海の事件・事故は 118番

「118」は海上保安庁緊急通報用の電話番号です